

八戸市美術館ボランティアだより

八戸市美術館
〒031 - 0031
青森県八戸市番町 10 - 4
TEL0178 - 45 - 8338
<http://www.hachinohe.ed.jp/artmuseum/>

ハビボ通信

八戸市美術館特別展「両用の眼 2007」 こだわらない自由がある。こだわりの美しさがある。 が7月21日から8月26日まで開催されました。今回は公開対談もあり多数の来場者で賑わいました。

「豊かさの発見」

八戸市美術館 「ハビボ会」会長 安藤清一

ハビボ会員は37名である。ハビボ会員は美術館との関わりを持ちながら、ボランティア活動を通して、奉仕活動、他者援助、ある組織やある人々を援助するという活動であると同時に、自分自身の自己表現にとっても重要な位置を占める。これをもう少し広げていくと、色々なところに関わることができる。

ボランティアリズム、ボランティア精神は、もともとボランティアの「ボラント」という言葉で、ラテン語にそういう言葉がある。これは「意思」という意味である。人間の意志。意思に基づく活動が「ボランティア」である。自分がやりたい、あるいは自分がやらなければならない、と本当に思ったことを行動に移すことがボランティアである。

これまでボランティアというと、どうしても奉仕や慈善活動といったイメージが強かったのですが、1995年の阪神淡路大震災をきっかけとして、人々のボランティアへの関心や活動が大きく広がりを見せるようになりました。

高度成長期を経て暮らしが豊かになったり、バブルの好景気がはじけたりしてくると、精神的な充足感を求める人々が増え、さらに、少子化や高齢化社会で余暇時間が増えてきたことなどして、ボランティア活動への関心や意識、活動の様子、内容などが変わってきました。

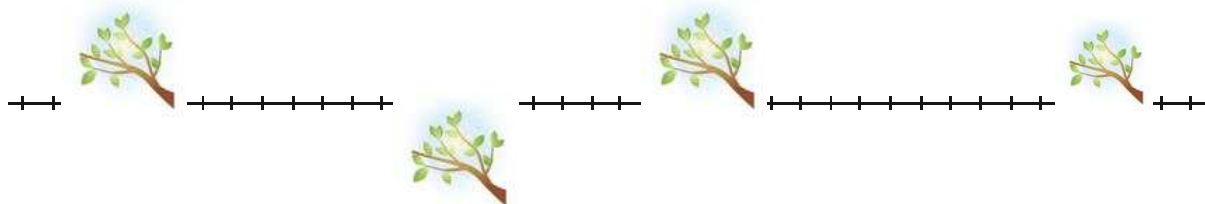
また、1990年代以降、国の施策としても、生涯にわたって自ら学ぶことをすすめる生涯学習の考え方がうちだされました。ボランティアをやるなら趣味や特技を生かし、知的好奇心を満たす活動がしたいという、現代の人々の本音、素直な気持ちを表している。

2001年3月に日本経済新聞社が実施した「やってみたいボランティア活動」によると、「美術館ボランティア」が2位であった。楽しみながら社会貢献するボランティアは自分のためからスタートする文化活動であり、結果的には、自分の生き方や周囲を豊かにする証である。

関わることによって自分の世界を広げる、自分の友だちを多くすることができる。自分の知らない色々なことを発見することができる。これがボランティア活動。だから、自分自身を豊かにする一つの活動だろうと思う。

関わるという言葉、ボランティア活動というのは、まさに関わる仕事である。社会的な関わり、ボランティア活動は人間的な、社会的な関わりを増やす、そういう機会を増やす役割を持っている。関わり方がどんどん広がっていく。

関わり合いということは、ボランティアをやってる側にとってはとても大事で、そこに新しい情報 Intelligence がどんどんわき上がってくる。ボランティア活動はそういったものを生み出す。それこそ豊かさの発見である。



「ハビボ会組織会」

5月8日(火)13:30から美術館講義室に於いて、組織会が開かれました。今年度の会員数は37名で、会長・安藤清一、副会長・工藤成子、事務局長・白石昭宣、会計・平さよ、岡本祐美子、監査・吉田智恵、佐々木惣一、幹事・松本貴四郎、岩崎優子、研修支援・白石昭宣、行事・広報・成田敏子、資料整理・若林松蔵、創作指導・安藤清一となりました。

両洋の眼展

こだわらない自由がある。こだわりの美しさがある。とした「両洋の眼」展が7月21日から8月26日まで開催されました。

著名な画家や若手画家70名の新作と特別出品2名の作品、計72点が紹介され、その中には青森県出身の佐野ぬい氏、豊島弘尚氏の作品もありました。また、両洋の眼委員長の富山秀男氏と佐野氏、豊島氏の公開対談は定員50名に対して100名ほどの聴衆が訪れ、なかなか聞くことの出来ない貴重なお話を耳を傾けていました。

美術館では、夏休み中の子どもにも楽しみながら観てもらおうと小中学生向けにクイズと、指定した3枚の絵を観ての印象、感想を書いてもらうアンケートを実施しました。集まったアンケートには思い思いの感想が綴られており、大人の眼とは違った見方がうかがえました。

公開対談開催

去る7月22日(日)、美術館講義室にて佐野ぬい氏、豊島弘尚氏、富山秀男氏の公開対談が開催され、約100名の方が来場して講義室は満員となりましたが、みなさん熱心に対談者の話に聞き入っていました。

両洋の眼委員長の富山氏が、「現代の美術は“パトロン”という存在がないこともあり、応援が活発でないと活動がしぼんでしまう。応援者とは鑑賞者であり文化の担い手である」と話していたのが印象的でした。

画家で女子美術大学学長の佐野氏は、絵を描くようになったきっかけ、『佐野ブルー』と言われる青色へのこだわり、絵を描けない時の対処法などを話されました。また、大学で生徒に教えるとき「背骨が真っ直ぐである絵を描きなさい」というお話では、『絵を~』の部分で『生活をしなさい』に置き換えてもいいかもしれないと思いました。

八戸出身の画家、豊島氏は大学時代の授業でのエピソードや文化庁の派遣で北欧に行ったときの話などをされました。また、具象・抽象・日本画・洋画という枠にとらわれず、ジャンルを超えて描くということもお話していました。

佐野氏・豊島氏両氏が、「絵を描くときは『色・形・』が大事。三番目のはいくつも解釈がある」とお話しされ、自分なら何が入るだろうと考えました。デザイン？空間？質感？それとも全然ちがうこと？もしかすると制作の度に違う言葉が入るのだろうか？みなさんならどんな言葉をいれますか？普段あまり聞く機会のない画家や評論家の方の話を聞いたのはとてもよかったと思います。画家本人の話を聞いた後に絵を改めて観ると絵の印象とは別に『親近感』を持って観ることができました。(笹本紗代)

アンケート結果をまとめてみました。十人十色、百人百様、いろいろな感じ方があり感受性の豊かさを教えられました。

「夜が明ける前に」 井澤幸三

Q1. この絵を見てどんな感じがしますか

暗い感じ、薄暗い、明るい、夜明けなのでこれから明るくなる、寂しい、ひっそりしている、暗いが女の子は明るい、女の子が絵から浮き出てきそう、孤独な感じなどですがほとんどの子は暗いと感じたようでした。

Q2. 女の子はどんな気持ちだと思いますか

寂しそう、(一人で、少し、とても、家族がいなくて)悲しい、夜明けを待っている、人を待っている、夜の中に何かをみつけたようだ、夜明けを眺めて少し感動しているような表情、大事な人(もの)をなくしたような表情、大事なものを探している、風景(背景)のように木と水が続いている中で広がって行くような感じが少女の気持ちも何処までも広がるようなすっきりした感じ、遠い目をして何かをみつめている、仲間はずれにされた、裸足、誰かを見送ったなど。

「赫い砂壁」 田村能里子

Q1. この絵を見てどんな感じがしますか

暑い国、寒い国、中国やインド、戦争をしているような国、ほとんど子が暑い国と感じたようです。

Q2. おじいさんは何をしているところだろう

〔人形〕を持っている、を作っている、と話している、と遊んでいる、を売っている、商売をしている、考えごとをしている、裸足で貧乏そう、動物が好きそう、やさしそうなおじいさん、ひとりぼっちで愛おしそうに人形をなでていて寂しい感じ、占いをしている、通りがかりの人に昔あった戦争の話をしているなど。

「白蓮華図 - 楽園 - 」 安西 大

Q1. この絵を見てどんな感じがしますか

涼しそう、楽園、天国、蝶が楽しそう、豊かな自然、静か、のどか、きれい、穏やか、落ち着く、楽しい、平和、全ての生き物がゆっくり休んでいてとても幸せな感じ、生命を感じる、人間の手の届かないところでたくさんの生き物たちがそれぞれの命の時間を謳歌しているようだ、今にも動き出しそうで水の音が聞こえてきそう、虫が歌を歌っているような感じ、森の中の小さな池など。

会員からの両洋の眼展

こだわらない自由がある。こだわりの美しさがある...の字句にこだわって拝見した。訴えたいもの、こだわっているものなど、文章より如実に感じられるのは想いが通じてしまうものを絵の中にこめているから。絵はちょっと恐いものかもとおもってしまった。絵に関わっていると誰でもちょっと難しくても味わいのある絵に心が傾いてしまう。私は「小憩」とか「せんとかたちとさんかくきいろ」に好感を抱きました。そういった意味でも今回の両洋の眼は安らぎを感じさせるものがたくさんありとてもよかったです。

佐藤玲子



中央画壇の大作とは、こんなにも迫力があるものだろうか。ただ単にサイズが大きいのではなく、入念に、緻密に描かれているのだ。その上、視る人を釘付けにしてしまうほどの強烈な色づかにも圧倒されてしまう。

「雨に洗われる骨の花」や「交差する刻」の楽しそうなすれ違いはとても印象的だ。煙草をくわえる赤い口やダウントウンのアメリカは古き良き時代の名残を色濃く感じてしまう。そして「七福呂」や「うたたね記」のほのぼのとしたのどかさは、思わずほっとした気持ちにさせてくれるところがあり顔もほころびてしまう。今年もこんな刻、至福な瞬間に巡り合わせてくれて感謝です。

清水政枝

両洋の眼のボランティアは楽しかった。会場の隅の椅子に腰掛け、そこから見える絵とじっくり向き合えて、あっという間に時間がたってしまう。グッズ販売では、「これは日本画？洋画？」の質問に考え込んだり、小学生が選ぶカードに感心したり、「聞かない作家だが新人？」の問いに困ったりしておもしろかった。三回目の来八を楽しみにしている。

千葉マキ子

会場係・グッズ販売

「両洋の眼」展の会場ボランティアをした。来場者の中に小学生の男の子が夏休みの宿題として「本物にふれた感想と一番いいと思った絵をスケッチすること、そしてなぜそう思ったか」という課題に熱心に取り組んでいるのが印象的だった。私も鑑賞するときの参考にしようと思った。他に親子連れ、女性同士の方など思い思いに絵を眺めていた。

浅野恵美子

お疲れ様でした

～「鑑賞の旅」～

NHK日曜美術館30年展

5月11日(金)

岩手県立美術館



多くの方が訪れており、私も大好きなこの番組のファンの多さを改めて思う。30年間続いているこの番組の良さはゲストが専門家だけでなく、音楽家、文学家といった文化人から経済人まで幅広いことだろう。

会場のVTRでは若々しい遠藤周作や五木寛之、手塚治虫らが語っていた。好きなことに関して語る時の人は本当にいい顔をするものだと思う。

もう一つの良さは本人がじっくり語ったり、または日記や手紙、家族の話からその時代と作家の人柄や人生観まで見せてくれることだろう。芸術家というのは、描く人、創る人ではなく、描かずにおれない人、創らずにはおれない人だとわかる。

今回は画面で見た素晴らしい作品が目の前に一堂にあり、ワクワクと楽しかった。八木一夫氏、山口華楊氏、杉山寧氏、三岸節子氏の作品と出会えて嬉しかった。

千葉マキ子

≡ 私の出かけた美術館 ≡

「春の古都 二条城」

～情緒のある旅には古都京都がお薦めです～

1000年よりの都、そして竹取翁の里から平安貴族、源氏物語へと。通り一つはいるとそのままの趣があちこちに流れています。

さて今回はその一つ二条城です。

「築城400年記念 展示収蔵館」公開の第一期「白書院の非公開障壁画展」の『雪中梅竹柳小禽図』初公開を白書院で拝見しました。400年を経た巨大な襖絵は新収蔵館へ、また、伝統的材料と技法からなる模写画は往時の豪華な姿で黒・白書院を飾っています。はるか彼方から耳にすることと目の当たりにすることの大きな違いにびっくりすることでしょう。

金田百合子

「鬨光展」

五月下旬、久しぶりに東京国立近代美術館へ行った。運良く生誕百年鬨光展が開催されていた。見たこともない字だが「AIMITUS」だそう。本名は石村日郎、広島県生まれ。17歳で上京し「池袋モンパルナス」と呼ばれた界隈で仲間たちと切磋琢磨しながら自らの画風を模索、二〇〇号にも及ぶ画布(板のようでもある)にモチーフは牛に見えるが題は「眼のある風景」、迫力がある。シュールレアリズムの影響だが決してその一言では片付けられない謎に満ちたものだろう。

「編物をする女」などなじみ深いものもあった。

戦争によってわずか三八歳で戦病死。

斉藤しげ子

石村日郎(いしむらにちろう) 鬨川光郎(あいかわみつろう) 鬨光(あいみつ)

～ 納涼会 ～

恒例の納涼会が7月28日(土)左工門三日町店で6時30分から開かれました。4月からハビボ会に入会した新人の私としては、少々緊張して会場に入ったのです。

美術館職員の四戸さんを加え参加者20人、自分の好きな花について一人一人語っていき、じゃんけんゲームをする頃には大いに盛り上がり、ゲーム勝者には図録や会員の笹本さんが作ったアクセサリが贈られました。最初の緊張は何処へやら、世代を超え、美術、芸術を愛する方々と本当に楽しく過ごせた納涼会でした。

(南郷資料館長の松本さんからブルーベリーの差し入れがありました。)

坂本和美



美術館の行事

ICANOF (イカノフ) 企画展 『イスマス展』

9月12日(水)～9月30日(日)
イカノフは市民とアートをつなぐ場づくりを考える市民によるボランティア団体で、毎年、写真展を開催しています。現代社会のさまざまを映し出します。

入場無料

コレクション展

10月6日(土)～12月26日(日)
コレクション展(～)では、八戸市美術館が開館以来収蔵してきた作品を年間四期に分けてご紹介します。

コレクション展

1月5日(土)～3月2日(日)

コレクション展

3月8日(土)～4月20日(日)
コレクション展(～)では、八戸市美術館が開館以来収蔵してきた作品を年間四期に分けてご紹介します。

ICANOF 第7企画展

「ISTHMUS(イスマス=地峡)展」

9月12日(水)～30日(日)

今回の企画展は南の島沖縄との遭遇がテーマということで、沖縄在住の写真家比嘉豊光さんの写真数百点が美術館に展示されています。他にも県内在住の市民による作品も展示、そして特別プログラムとしてトークショーやダンスも行われました。いろいろな視点からの芸術を堪能しましょう。

お知らせ

水彩画教室が6月～9月まで開催されました。講師の方は安藤清一さん、白石昭宣さん、浅沼弘さんでした。

油絵入門講座開催

恒例の油絵入門講座が10月から20年1月までの第1・第3の金曜日に開催されます。時間は午後6時20分～8時までで美術館の講義室で行われます。講師の方は安藤清一さん、若林松蔵さん、工藤成子さんです。

東北の美術館催事

青森県立美術館 9月29日(土)～10月21日(日)

【舞台芸術の世界】

ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン

岩手県立美術館 10月6日(土)～11月25日(日)

もりとびあねっと共同企画

【アート・記憶・場所】

秋田市立千秋美術館 9月27日(木)～

11月25日(日)

【秋田蘭画とその時代展】

宮城県立美術館 9月23日(日)～11月4日(日)

【日展100年】 文・帝展時代から今日まで

福島県立美術館 10月6日(土)～11月11日(日)

【上村松園展】 近代と伝統

東京近代美術館 9月4日(火)～10月21日(日)

【平山郁夫展】 祈りの旅路

編集後記

八戸市美術館に於いて「両洋の眼」展も終了し、これから正に芸術の秋到来と言つことので9月12日よりイカノフの企画展「イスマス展」が始まりました。芸術鑑賞が出来るのは平和であると、先頃観た映画「ヒロシマ・ナガサキ」で改めて痛感しています。 成田

暑すぎた夏がようやく過ぎて、秋の気配が感じられるようになりまし。

私は絵を観るとき「色(配色)を一番重視して観ます。先日「両洋の眼」展ではかつこいい配色やこんな色の組み合わせもあるんだ」とびっくりした配色もありとても勉強になりました。素晴らしい絵を何回も観ることができ、とてもリラックスした時間を過ごすことができました。 笹本

8月9日、痛いほど暑い日差しの中、長崎平和公園にいました。浦上天主堂の悲しい歴史を心に、平和の大切さを思いました。美しいものを美しいと感じることが出来るのは大事なことだと思えます。 千葉

写真の見方はよくわからないうが、いつごろから切り取られた時間の凝縮を感じるようになりまし。今年で7回目のイカノフ展、地方でこれだけの写真展はなかなかないと思う。 八戸ですこい。 山口

